

本校創設と神殿原次郎先生について

本校創設については、当時農業知事といわれるほど重農主義政策をとった徳久恒載知事が、球磨開拓のために本郡に農業学校をつくることとし、紆余曲折のすえ、神殿原の原野が選ばれ、開拓の使命が重視された。

創設当初の実習担当教師として学校農場の開墾にあたり、本校農場の基礎を作った神殿原次郎先生について、第2回卒業生のお話を記す。

「広漠たる神殿原の一角、僅かに開墾された農場に毅然たる立ち姿が彷彿として脳裡に浮かんでくる。惟うに先生は講師としての立場で生徒の訓育の任に当たられる為、特に本校にのみ設置された厳然たる存在だった。

先生の住宅は本校前の校長宅隣の小さな家で只お一人の住まいだったらしい。朝、夜明けと共に例の服装、上衣は普通のもの、半ズボン、それに制帽、そして手作りの半草履という姿で、食塩を一つまみして門前の流れに洗面し、その俣農場を一巡された。

中食其の他全て寄宿生と行動を共にし、入浴後帰宅という日常であった。

茫茫たる荒野を開き、而してこれを整備し作物を栽培することが我々少年の初めて当面した農法であり今昔の感にうたれてならないのである。

（当時の上村村長 池松豊記氏に命を受け）自ら神殿原姓を名乗り開拓に従事し臥薪嘗胆辛苦の限りを尽くした。

惟うに僅か二年有余の在職、しかもその職柄といい単に生徒の指導監督の任にあらせられたにも拘わらず、全校挙げて崇敬の的であり、その死後も誰言うことなく遺徳を偲ぶの余り記念碑の建立となったのである。かの記念碑は総て校内全職員生徒の手に依ってなされたもの、今は松林に移転されたが当初は学校南端の小高い処にあり農場は勿論全校を一望の下に睥睨し、ひねもす校内を見守って下さるかのようであった。」（『球磨農高七十年史』より）